

コーディネーターとしての事業に対する意見シート

■事業名:平成 16 年熊野鼓動協働プロジェクト(まちづくり)

■コーディネーター氏名・所属:辻本晴美 (特)市民ネットワークすずかのぶどう

■ふりかえり会議開催年月日:平成17年 3月18日

1. 協働のプロセスについて意見

まず、行政の方の紀伊半島を活性化したいという大きな目的のために、どんな手段が最適かという情報を求めるための行動が、最適な協働の相手方を見出すのに役立った。それに呼応した相手方と、熊野古道をどう活かすかとい目的がしっかり共有されたことが、実際の町屋の改装・運営につながった。両方にトライアンドエラー・ゴールフリーという感覚があり、柔軟な対応の出来る関係が築けた。

お互いの信頼関係と、もともとの両者の柔軟な姿勢とが、効果を発揮して、対等な協働事業を生み出している。

2. 成果についての意見

具体的に「カフェ・クリーム」の運営ノウハウが順調にしているという満足感が両者から感じられた。また、今後自立的に運営してくれる市民に託したいという点でも意見は一致している。非日常の視点として、「町の人自身が町の魅力を旅行者に伝える」また、日常の視点として、「変に観光開発するのではなく、前からある熊野古道を大事にする」ということも両者一致している点が成果としてあげられる。「浮き足立ったところが無い」とおもいました。「尾鷲暮らしを楽しむ」というところに視線が集約されているのでしょう。

3. 課題・改善の整理とまとめ

いろいろ話を聞いている中に『設定がしっかりしているとどこでも大丈夫、いづれ成果は上がる。自分が誇れるまちにすることが一番大事、』それは本当に大事なことです。その上に尾鷲には資源として「熊野古道」があります。現状では、協働の相手を求めて努力をされた行政担当者と、俗にいう「よそ者・若者・ばか者(努力の塊としての)」として県外(岡山)のNPOが牽引車となっておられる。決して自分からではなく、尾鷲市民自らが考え、行動するようにして、市民が育つ手助けをしてきたといわれている。市民の手に渡せるよう着々と準備もされているようである。最初は要望のみであった市民側にも自発的な動きが出てきたとのことでもある。受託側の努力によって、コストもおさえられている。今後の課題は何もなさそう…いつかは、全面的に民営化が望ましい方向なら、今後、今の担当者が変わって、岡山の(特)ミーツさんのかかわりも無くなったときに、どう市民が運営していくのかの共有イメージをしっかりと作ることが課題であると思う。

4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

今は、広報媒体としての拠点作りをされているのだが、事業の目的として「魅力的なまち暮らしのためのコンテンツを見出す」という事も言われている。事業展開を図る上で、拠点からの広がりをどう創っていかれるのか期待している。『事業の成果は具体化せずゴールフリーにすることが必要・参加者各自のゴールが設定できてこそ意味がある』とのことであり、また『軌道修正には、顔を合わせての情報交換がいい』とのことでもあった。せっかく柔軟なことをしておられるという感が強いので、顔を合わせやすい人の中での、キャッチボールに終わらず、いろいろの人が自由にかかわれるコンテンツが出来ていくといいな、尾鷲のまちの魅力が最大限に発揮されるといいなと思います。

コーディネーターとしての事業に対する意見シート

- 事業名:平成16年度熊野古道協働プロジェクト(まちづくり)
- コーディネーター氏名・所属:川戸 由起 (市民ガーデンティルス)
- ふりかえり会議開催年月日:平成17年 3月18日

1. 協働のプロセスについて意見

このパートナーシップが、どういうプロセスを踏んで出来て行ったのか、という事を分析することは、NPOが市民そのものであり、そのスタンスを保ちながら、より公共性や社会の課題というものに理解が深い人たちの集まりである、ということを証明することになると思います。それは、「行政が協働を考える」上で、最適なパートナーを選択するひとつの指針として、大いに参考になるのではないかと思います。

最初にお伝えしておきたいのは、この事業は、県と尾鷲市駅前商店街の人たちとの協働事業である、ということです。

そして、情熱的に動いた県担当者と同じ思いを持って、行政、市民両者をサポートするという立場で「市民参加のまちづくり」という協働事業をコーディネートしたのが、NPOであったということです。

そのNPOの側から、小石原さんが描いた活性化策は、どこかの街で成功した事例を押し付けるものではなく、一緒に悩み、考え、自分の中にあるノウハウを、尾鷲の人たちの気持ちに沿った形にして、提供することでした。

「ここでは、まちづくりの匂いを極力隠したかった」という言葉が、協働が、いかに敏感かつ柔軟な能力を持って行われるべきものであるか、ということ、物語っていると思います。

地域振興部の平野さんとミーツの小石原さんが出会ったのは、今から1年ほど前のこと。平野さんが、あるまちづくり雑誌の中に、岡山のコミュニティカフェと小石原さんの記事を見つけたことがきっかけでした。

世界遺産に指定された「熊野古道」をめぐる、様々な観光地としての地域振興策が打ち出される中で、平野さんら県のプロジェクトチームは、「住民参加によるまちづくり」の気運を高めることで地域の活性化を図ろうと、地元に対して働きかけてきました。

3年ほど前に、尾鷲市当局と住民に呼びかけ、このゆびとまれ方式で作った「まちづくりの会」は、最初の60名が、100名に達するところまで広がりました。

しかしながら、すでにある程度の結束力があつたいくつかのグループが、観光客を

もてなすという意識を持って、美化清掃運動や、商業的な動きなどの活動を模索し、行動に移していく一方で、自分は何ができるのか、何がしたいのか、ということを見出せないで疎遠になっていく人たちが出てきました。

せつかく一度は集まった人たち。何か一緒に出来ることはないものか、と考えていたところに、コミュニティカフェの記事を見つけたのでした。

そして、小石原さんが、ミーツの本拠地である岡山において、コミュニティカフェを成功させ、その集客力は、同じ市内にあるかの有名なオープンカフェ「スターボックス」を抜いてしまったという実績を持つ、ということを知り、岡山まで出かけていきました。

平野さんらは、これこそみんなで楽しく取り組める事業と思い、「NPO 法人ミーツ理事の小石原さん」の人柄や考え方に確かなものを感じて、最初の呼びかけを行う講演会に、彼を招いたのでした。

そこで新たに県担当者が本年度の目標に掲げたのが、次のような趣旨のまちづくりでした。

- ・ 熊野古動の観光客をもてなすための街づくり
- ・ 地域市民の交流の場をつくり、魅力ある街を市民の手によってつくっていくこと

そしてここから、県とNPO、尾鷲市駅前商店街のみなさんとの、「まちづくりカフェ」作りがはじまるのですが、小石原さんは、カフェの内装に汗をかき、作り上げた人たちと一緒に、5月のカフェオープン記念第1弾「蓄音機を持ち込んでレコードを聴く」というイベントで、カフェに満員の人を集めてみせ、一度その手腕を見せただけで、引っ込んでしまいます。

「今度は、みなさんの番ですよ。」という気持ちだった、と語る小石原さんですが、すぐには、まちづくりのいろいろな動きが現れるというようなことにはならず、シャッターが半ば閉まっているような状態が続いた7月、8月、9月は、とても苦しかったそうです。

地元住民の人たちからすれば、この店は彼がやっていたら大丈夫、という気持ちがあったのかもしれませんが。

しかし、それ以上に、プレッシャーを感じていたのが、県側の平野さんと森さんでした。「打ち上げ花火みたいなもんやったんか」とか「うまくいってないんやないか」という言葉が聞こえてくるようで、相当気をもんでいたようです。

でも、何度も話し合っ中で、「地元の人が集まりたいと思うことが必要なんだ」「もう少し待ちたい」と語る小石原さんの方針に同調し、全面的にバックアップすることを決意

します。

それは、日々の生活を営みながら、まちづくりに参加する市民の時間の流れやリズムに、行政が同調していくという、大変に重要な行動であったと思います。

これこそ、現在の行政と市民の協働において見落とされている、大事な行動指針ではないでしょうか。

事実、この頃から、半分閉まったシャッターの下から覗き込んで、「誰か、いるんか？」と声をかける人が集まりはじめ、「どうして行こうか」「これをやったらどうか」という話しが、交わされるようになっていきました。

そして、今、「ミニコミ誌」の製作や、「カフェの2階で、体験宿泊」をする企画などが、面白くなってきたそうです。

私たちが会議をするにあたって、「クローズ」の看板をかけてくれていたのですが、その間にも、何人かの人々が、仕事の途中で立ち寄ったという感じで、いきなり「おーす」と言って入ってきて、カフェが地元の人たちのたまり場になっていることを、感じとることができました。

2. 成果についての意見

両者の協働を、契約関係という形で表すと、「業務委託」ということになりますが、事業の進め方で特筆すべき点を挙げますと、次のようなことであったかと思えます。

1. NPO 側のソフト、「まちづくりカフェ」事業の経営ノウハウに対して、委託料が支払われていること。
 - [事業予算額340万円の内訳は、地元の人たちと一緒に手作りしたカフェの改装費約10万円と、月4万5千円の家賃、専任で店を切り盛りしてくれる地元の女性1人の人件費、を除いた残りが、小石原氏のこの事業に費やした時間に対して支払われている
 - NPO 法人「ミーツ」は、契約事業終了後、運営から撤退することを、最初からうたっている
2. 担当者・NPO・住民が、時にはぶつかりあい、様々な葛藤を共にしながら深く係わり合い、市民レベルの信頼関係を築いて進めていくというプロセスを重要視していること。

- この考え方こそ、まちづくりの現場の試行錯誤を経験してきた NPO だからこそ肌で分かる感覚であり、公職・平等などのさまざまな縛りがあるがために、行政の担当者が成しえない部分を、NPO が補っているという事が言える。

3. 成果目標を、参加した市民ひとりひとりの満足度、に置いていること。

- 行政のストーリーと最初の事業の見積もりがある中で、事業を進めながら、目的と手段を設定していく作業がなされた。
- 小石原さんの言葉で「トライ&ファー」の「ゴールフリー」

現在の行政担当者の悩みは、「成果をどう評価するか」というところにあると思います。これまで、こういった事業の「成果」といえば、集客数とか、売り上げとか、対費用効果を数字で現したり、出来上がったカフェの施設や利用のされ方、としての評価で現すことが当たり前でした。

そんな中で「市民ひとりひとりが、この事業に参加することで得られたもの」をどう「成果」として現すのか。

また、どのように説明責任を果たし、周囲の理解を得、さらに事業を続けていかれるのか。エールを送りつつ、注目していきたいと思います。

3. 課題・改善の整理とまとめ

この項目に関しては、私から申し上げることはありません。

事業の当事者の方々が、今後の課題として挙げておられたのは、

- ・ 市当局との協働への広がり
- ・ 事業の情報発信と認知の広がり

ということでした。

事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

今回のふりかえり会議では、「三重県地域振興部東紀州活性化・地域特定 P」と、「特定非営利活動法人 ミーツ」のそれぞれの担当と代表の方のお話を聞き、三重県の「NPO と行政の協働」の現場が、ここまで先進的に行われていることに、大変心

強い思いを抱くことができました。

NPO 室におかれてましても、この先の展開にさらに注目し、データを集め、協働の良い事例として、この事業の情報を各方面に届けていっていただきたいと思えます。